組立説明図の研究

林 浩平 （京都大学）

本発表では、組み立て家具やプラモデルに付属する「組立説明図」を扱う。2013 年には、模型メーカー・タミヤの組立説明図ばかりを収録した『プラモ インスト ブック』（大日本絵画）が刊行されている。組立説明図は消費者に組み立て方を説明するという本来の役割を越え、それ自体鑑賞の対象としての可能性も有していると言えないだろうか。

近年 CAD が非専門家でも扱えるものになり、3D プリンタなどのデジタルファブリケーション（DF）技術が普及しつつある。これまで専門家に閉ざされていた設計・製造が、市民に開かれることによる産業の変化は「メイカームーブメント」（クリス・アンダーソン、2012）として工学や経済の分野で議論されてきた。既に多くの建築・芸術の教育現場では DF が取り入れられ、この技術に手仕事の再活性化を期待する向きもある。画一的な大量生産に対するアンチテーゼという点ではアーツ&クラフツ運動との親和性も指摘される。

本発表では、このような現状を踏まえつつ、それよりも前から開かれの契機があったことを指摘し、分析を試みる。それが組み立て家具やプラモデルであり、それを可能にしてきた、演劇における台本のようなものとして組立説明図に着目する。組立説明図は、一般消費者に組み立ての過程を開くために作成される資料であり、工業生産の現場で用いられる設計図面や、製品に付属する取扱説明書とは区別される。この資料の指示に従う限り、不特定多数のどんな技量の一般消費者も「正しい」方法で組み立てて完成させることが出来る。設計図面や取扱説明書と大きく異なるのは、組み立ての過程を工場の生産ラインや製品の触れられない内部に押しやらずに、一般大衆の手によって行わせる点だろう。指示を与えつつも過程が開かれていることは、指示の無視、アレンジ、誤用を可能にする。一般消費者との関りのなかで、各企業の組立説明図はそれぞれ独自の様式を発展させてきた。

プラモデルを含む「模型」に関してはメディア論としての先行研究が存在するが、模型と模する対象との関係に議論の重心が置かれ、組み立てる行為や組立説明図については取り扱われていない。また、先述の『プラモ インスト ブック』では著名なモデラー（プラモデルを組み立てる人）によるコメントが多数掲載され、組み立て時の快が生き生きと描写されているが、個別具体的な話題に留まっている。それらを適宜参照しつつも、組み立て家具の説明図などと比較しながら分析することで、部品と完成品、企業と一般消費者の間で、組立説明図がどのように振舞ってきたのかを明らかにすることを目指す。